

企画の概略

松浦武四郎『近世蝦夷人物誌』

ヴォルフガング・シャモニ / 秋沢美枝子

以下のプロジェクトはまだ印刷するまでに至っていない仕事を公表して、読者の批判を乞うものである。誤りのおそれのあるものをも発表して、必要とあらば絶えず修正を加えていくものとする。読者の方々はどうか忌憚なくご批判下さり、また訂正・追加すべきところがある場合はご教示いただけたらありがたい。ご連絡は wolfgang.schamoni@gmail.com にお願いたい。

松浦武四郎（1818－1888）は普通北方探検家と称されている。確かに今日では彼は何よりも日本の北方の地域（つまり現在の北海道、サハリン島、千島列島）を探検し、それらの地域についてたくさんの貴重な記録類をのこした人として記憶されているのである。しかし彼はそれをはるかに超える人物であった。彼は地図学者にして、また画家（彼の旅行記などには数多くの、素人の域を超える風景、動物、植物、また北方の人々のスケッチなどが多く収められている）であり、詩人（和歌も漢詩も書いた人）であり、また一種の民族学者であり、一種の考古学者（古代の遺物・美術品の収集家）であり、また政治活動家（志士）でもあった。

松浦は日本が 1868 年の明治維新を境にして政治的、社会的また文化的に激変した、その二つの時代を凶太く生きた人物である。しかし、彼の六回にわたる北方への旅、弘化二年（1845）、同三年（1846）、嘉永二年（1849）、安政三年（1856）、同四年（1857）、同五年（1858）はすべて幕末、つまり明治維新以前になされた。最初の三回の旅は松浦はいわば「私人」として行い、あとの三回は箱館奉行所に雇われた人、つまり幕府の「お雇」として行ったのである。日本の北方の地域、及びその住民のアイヌ民族に政治的に決定的な変化をもたらした安政元年（1854）の日本の開国はまさに彼の第三番目と第四番目の旅のあいだにあたる。

松浦は若い時から、また明治時代になってからも日本国内の旅を重ねており、それについても、今ではそれほど注目されないが、数多くの貴重な記録類をのこしている。ところで、上記の北方の旅の記録には、（1）旅行中小型の横長の帳面（野帳）^{のちょう}に記された手控え類。（2）それらの手控えに基づいて書かれた数々の旅日誌、それらは彼の雇い主である箱館奉行所ないし彼のパトロンに献上したものである。（3）最後の三回の旅から特に興味深いところを書きぬいて、文学的に彩色をほどこされた作品として安政六年（1860）から文久三年（1863）の間に出版された、全部で九編の紀行文。通常、23 丁から 27 丁（46 頁から 52 頁）の、整版印刷のこれら

の紀行文は、各旅行の報告のみでなく、松浦と親しかった何人もの画家の描いた挿絵（多く贅沢な多色刷り）を附し、それらにさまざまな文学者が和歌や漢詩を書き加え、または跋文などを書き、各冊に十人、あるいはそれ以上の画家や文人が参加したのであった。彼はさらに文久三年（1863）から明治十一年（1878）の間に北海道の全土を描いた 14 冊にのぼる地誌を出版している。（4）これから旅から得た知識を基にしてアイヌの風俗などを描いた種々の本、たとえば『蝦夷葉那志』（安政四年刊）、『蝦夷漫画』（同六年刊）、『蝦夷訓蒙図彙』（成立不明、草稿）などを著した。そのうちで最も異色を放っているのは、『近世蝦夷人物誌』（安政四年から七年までに執筆された草稿）である。この『人物誌』が私どものプロジェクトで取り上げる著作である。（5）それと並行して嘉永三年（1850）以来北方の種々の大小の地図を発表し、その最大のものは安政六年（1859）のもので、26 枚から成る巨大な、9800 語にのぼるアイヌ語の地名を書き込んだ、三色刷りの北海道の地図である。（6）アイヌ語の語彙表、旅行者のための道程遠近表、蝦夷をテーマとするすごろくなど種々の一枚刷りのもの。この北方への関心とは別に（1）日本本土を旅した折の様々な旅行記（老後にはそれらを小型本として出版して友人に配った）、（2）松浦武四郎自身が蒐集した古物・古美術の図録類（これらの著作からは趣味人の松浦の姿がうかがえる）、（3）古人の著作、和歌集や漢詩集、また儒者などの著作をも世に出している。結局松浦が出したこれらの出版物は総数 80 点以上にもものぼるのである。そのうちの何点かの貴重な版本が現在ドイツの博物館と図書館にも所蔵されている。

これら数多くの著作のうち、現代人にとってもっとも面白い著作は上記（4）のアイヌ民族の個人々々の情報を集めた『近世蝦夷人物誌』（以後『人物誌』と省略）ではなかろうか。この『人物誌』は、それぞれ一人のアイヌ（時には兄弟、夫婦など）の重要な伝記的なデータ、また注目すべき言動などを記述した、全部で九十九章の短い話から成っている。松浦はここで意識的に東アジアの列伝の伝統を受け継ぎ、孝子、烈女、豪傑、貧窮の人、障害者などの伝を集め、十九世紀五十年代に「場所制度」のもとに生きるアイヌの姿をひろく、また詳細に記録していて、それは現代のことばでいえば社会ルポルタージュとでも言えるものなのである。その中で、松浦は場所制度下の和人によるアイヌ搾取の現状、安政二年（1855）に導入された幕府の同化政策、また安政四年の幕府のアイヌに対する種痘政策について、それらに順応するアイヌ、また反抗するアイヌの両方の姿を、理解と同情をもって描いているのである。そういうことで、この『人物誌』は日本の「植民地政策」の問題を描いた文学としても読め、またすぐれて歴史的な資料をも提供しているともいえるのである。

この書の成立は本文内の記述と他の資料（いわゆる「自伝」など）の記述を総合すると、ほぼ次の通りであったと思われる。それぞれの日にちの根拠に関してはC.2の年譜を参照されたい。

- (1) 松浦は安政四年八月に第五回目の蝦夷地の旅から箱館に帰ると『人物誌』の初編三巻の筆を起す。『丁巳日誌』上で、再三度「近世蝦夷人物誌にするすが故に此編にはしるさず」などと断る。（『丁巳日誌』凡例の日付は安政四年10月15日）。
- (2) その年の12月の除夜つまり十二月三十日に箱館で『人物誌』の「凡例」を執筆。
- (3) 安政五年元旦に独松居士こと向山黄村が初編の漢文の叙を執筆（『自伝』235）。
- (4) 続いて二日に『人物誌』初編を箱館奉行所に納本して同12日に白銀二枚を頂戴する（『燼心餘赤』530参照）。
[安政五年1.24から8.21まで第六回蝦夷の旅]
- (5) 安政五年暮秋つまり九月に玉匣外史（実名不明）が第二篇の漢文序を執筆。
[10.5 箱館発、11.22 江戸着]
- (6) 安政五年の手控 第18番に「人物志え入るるもの」295人のリストを記す（『選集』6、274～281）。そのうちの33人のみが収録された。
- (7) 安政五年十二月八日に松浦は『人物誌』（初編）の上木（出版）願いを外国奉行の永井尚志に提出したが、箱館奉行あたりの「注意」のため、却下される（『自伝』276）。12月11日に同内容の願書を箱館奉行所に提出（『選集』6、274）。
- (8) 安政五年十二月三十日に松浦は第二篇の「凡例」を加える。
- (9) 安政六年七月十日に松浦は『戊午日誌』完成、「今日より人物誌二編に懸る」（『自伝』282）と記す。
- (10) 安政六年九月三十日に第二篇を箱館奉行所に納める（『燼心餘赤』530）。
- (11) 安政七年一月十九日に「近世蝦夷人物誌後編々輯上納」（第二編）の為に箱館奉行所から銀二枚を頂戴する（『自伝』286）。
- (12) 松浦は第三編の結末の夢は「深川伊予橋の寓居」で見たと記す（『人物誌』3.36）。それは松浦が安政六年の夏頃から七年四月一日の間、深川に住んでいたことと時期的に一致している。

松浦の出版許可願いが、箱館奉行所に異見があつて許可されなかったとき、彼は自らこの第一編三巻の写本を複数作成し、それらを彼のパトロンたちに献上したと思われる。

現在、初編の自筆本が二部伝わるが、そのうちの一部は三重県津市の石水（せきすい）博物館に、もう一部は愛媛県宇和島市の宇和島伊達文化保存会にある。この二つの自筆本には「初編」とも「第一編」とも記されて

いないので、当初松浦は続編は考えず、これで一応完結したと考えていたように思われる。

全三篇の複雑な写本状況の詳細は下記の表をご覧ください。北大の佐々木利和教授と北海道歴史博物館の三浦泰之氏のご好意で、我々は上記のすべての写本の写真が利用できることとなった。

「近世蝦夷人物誌」の現存写本

	I.a 初篇 上 本文	I.b 初篇 中 本文	I.c 初篇 下 本文	II.a 二篇 上 本文	II.b 二篇 中 本文	II.c 二篇 下 本文	III.a 三篇 上 本文	III.b 三篇 中 本文	III.c 三篇 下 本文
U 自筆本 伊達文化保 存会 宇和島市	x	x	x						
S 自筆本 石水博物館 津市三重県	x 叙欠	x	x						
D 写本 北海道立文 書館 札幌	x	x	x						
T 写本 天理図書館 天理市 奈良県	x	x	x						
N 写本 旧内閣文庫 国立公文書 館 東京	x 叙欠	x	x						
M1 自筆本か 松浦武四郎 記念館 松坂市				x	x				
M2 写本 松浦武四郎 記念館 松坂市		x	x	x					x
H 写本 函館市立中 央図書館		x	x	x	x				x

『人物誌』が活字になったのはかなり遅く、著者の孫、松浦孫太によって1912年7月から1914年1月まで、京華日報社発行の雑誌『世界』（98号から116号まで）に発表されたときである。その本文は自筆本をもとにし

ていると思われるが、読点を施し、漢字を増やしているようである。まれに脱字、脱文が認められる。しかしながら、現在、写本の伝えられていない巻々は、この『世界』本に拠る以外ない。それからしばらく時代が下がって、戦後二種類の活字本が出版された。まず高倉新一郎によって 1969 年に「日本庶民生活史料集成」第四巻（三一書房）に発表されたものが第二の活字本で、この本は初編のみいわゆる道庁本に従い、第二編と第三篇は『世界』によっている。当時文部省資料館に所蔵されていた写本（現在三重県松坂市小野江町（旧三雲町）の松浦武四郎記念館にある写本）は閲覧できなかつたという。まま誤植や脱字があるので、注意を要する。第三の活字本は吉田武三によって 1977 年に「松浦武四郎紀行集」第三巻（富山房）に発表されたものである。吉田は上記の松浦武四郎記念館にある写本や、函館図書館にある写本を校合して、そののこりは『世界』により、より正しい本文を作ろうと努力している感がある。『世界』にある誤字などを訂正して、脱字の補充を明記し、良心的な翻刻であって、そのかぎりでは目下最も信頼できる活字本であると言える。もっとも当時はまだ松浦自筆の写本類（宇和島本と石水本）が閲覧できなかつたとのことなどで、まだ完全とは言えない。最近（2021 年）に高木崇世芝の『近世蝦夷人物誌』が出た。貴重な写真及び挿絵、また書写本の正確な書誌を含んでいるが、本文には問題がある。なお、諸版本の詳しいことはこの企画の F1（文献目録）を見ていただきたい。

なお自筆本のいくつかの章には作者自身の筆になる非常に興味深い挿絵が附されている。他筆の一部の写本にも松浦のものを模写した挿絵が附されている。しかし松浦孫太によって『世界』誌上に初めて活字化されたとき、挿絵はすべて省かれた。つまり、『世界』にしか伝えられていない第二編の第三巻、第三編の第一、第二巻の挿絵は全く伝わっていないということになる。戦後に刊行された高倉の活字本には道庁本の挿絵が用いられたようである。吉田の活字本にはどうやら吉田自身が記念館本を模写したらしい挿絵が附されている。そして更科源蔵と吉田豊の両氏が 1981 年に発表した現代語訳には記念館本の挿絵の写真が用いられている。2021 年の高木版には宇和島本と記念館本の挿絵が採用されている。このプロジェクトではそれらのすばらしい挿絵を示すことが出来ないのは非常に残念である。

以上の「人物誌」の活字本は高木版を別にすれば現在一般読者は簡単に手に取れない。高倉本も吉田本も絶版で、入手しにくい。そのうえ、上に記したように、それぞれの本文にわずかながら問題があり、また註がほとんどないため、現代の読者にとっては理解しがたいところがある。そういうことで、目下存在するすべての写本を校合して信頼の置ける本文を作成し、それに、現代の読者の理解を助けるような註を施したらどうであろうか、との考えが生じてきたのである。

それで、私どもは 2010 年から日本の研究者とともに、上記の目的で仕事を進めてきた。しかし現在のところ、この仕事の完成の見通しがなかなか立たない。それで、以前 W.シャモニが『人物誌』の九章を、ドイツ語の読者のために詳細な解説と十分な註を施してドイツ語に翻訳してきた（それらの章はすでに発表済）こともあって、今回それらに手を入れたものと、また新しく翻訳した章をこのホームページで逐次発表しようと思う。この機会に、私どもはここに、それら翻訳した章を読む人の参考のためにそれぞれの章の日本語の原文をも簡単な註を施して発表したいと思う。それらの本文作成は上記の二人の編者によってなされ、また註も二人によって施されたが、北方史やアイヌ文化に関する一般的に周知の事柄を超えるような註は、編者がその点についての専門知識を有しないため、残念ながら断念せざるを得なかった。註などに誤りがあるかもしれないので、読者の御教示を乞う次第である。日本語文については、秋沢美枝子に最終的な文責があり、ドイツ語訳・ドイツ語による註は W.シャモニに最終的な文責がある。

ところで、諸外国に於ける松浦武四郎の研究は管見に入った限り、非常に少ない。翻訳は、前述の W.シャモニが発表した合わせて九章のドイツ語訳以外、メキシコでは、たったの一章であるがスペイン語に翻訳されている。また日本で最近また一章のドイツ語訳が発表された（詳細は F1 の文献目録を参照）。それ以外の欧米語の翻訳は管見に入った限り目下ないようであるが、この点についてもご教示いただけたら大変ありがたい。

まず、二年を予定しているこのプロジェクトは次のような部分からなり、ひとつひとつこのホームページで発表していくものとする。

- (a) 初めに第一篇、巻上の序、凡例、そして第三章を取り上げ、それらのドイツ語の訳文をこのホームページで発表する。以後『人物誌』のいくつかの章を同じ方式で発表していくこととする。「人物誌」は全部で九十九章あるが、このプロジェクトでは目下その全体を紹介することは考えていない。
- (b) 日本語のテキスト作成については「編者の凡例」で、ドイツ語の翻訳と註については *Vorbemerkungen der Herausgeber* でのべる。
- (c) 『人物誌』の背景がよりよく理解できるよう、次のような資料を付ける。(1) 文中に出てくる専門用語などの簡単な解説を集めた「用語集」(C1、D1)。回が進むごとに「用語集」の項目も増えていくことになる。(2) 松浦武四郎の年譜（とりあえず 1854 年から 1860 年までのみ）、(3) 『人物誌』全編の登場人物の総人名索引 (D3)。
- (d) 文献目録類 (1) 松浦武四郎に関する基本文献リスト (E1、F1)。(2) ドイツの博物館や図書館に収蔵されている松浦武四郎の生前に発表された「刊行物」の一覧表 (E2、F2)。

2022. 7. 24 記 2023. 1. 7 訂正